

はじめに——部外者の応答可能性

ドナルド・トランプが大統領に就任した二〇一七年の夏、わたしはアメリカ合衆国ニューヨーク州の中央に位置する大学に留学した。この「ニューヨーク」は、あなたが想像する「ニューヨーク」ではない。後者の、狭義のニューヨークが指すのは、マンハッタンのとうとう狭い地区であって、わたしの留学先は、そこからバスで四時間ほど離れた、アパラチア山脈の北端付近に位置する、野生の鹿や狼や熊が出没するような田舎にある大学である。

ニューヨーク「州」とは、およそ北海道と九州を足したくらいの広大な面積をもつ範囲を指し、その各地域にニューヨークの州立大学が点在している。わたしはそのうちビンガムトンという、総合大学（university）が置かれたなかではもつとも寂れた都市に留学した。

ここは冷戦後期に防衛費のカットにもなつて産業が衰退した地区で、到着してすぐ街を案内してくれた教員が、「このあたりを歩くと、ここがかつては重要な街だったことが

偲ばれるだろう」と言っていたのを思い出す。わたしは北海道の釧路市という、まさしく冷戦後期から寂れた、ビンガムトンとそっくりな街で育った。釧路もビンガムトンも冬はマイナス二〇度を下回るような気候だったから、わたしは地元で隠居して勉強するような気持ちで、三〇歳からの留学生生活を開始した。

ひとくちに「アメリカ留学」といってもさまざまな形態があるが、わたしの留学は、博士号 (PhD) を取得するための、順当にいつても五年ほどを要する、いわゆる学位留学だった。所属は比較文学科 (Comparative Literature) とさうデパートメントで、これは簡単に言えば、英文科 (English) とかアジア研究 (Asian Studies) とさった、言語や地域で研究対象を区切るディシプリンとはことなり、そうした既存の学問分野の垣根を跨いで、多言語的で分野横断的な研究が推奨されるような、そういった領域である。

この「比較文学」という呼称はいささかミスリーディングなもので、われわれはかならずしも「比較」しないし、研究対象も「文学」にはまったくとどまらない。実質的に、前者の「比較」は複数のディシプリンにまたがるということの意味し、後者の「文学」は、日本の「文学部」の「文学」の曖昧さにも似ていて、人間の文化活動の全域を包含する言葉であると考えてよい。この学際性、インターディシプリナリティは、移民国家アメリカにおいてかならずしも超優秀なジェネラリストだけが参入するようなものではない。わたしの同期のほぼ半分は、そもそも三ヶ国語、四ヶ国語が常時話されているような家庭で

育ったという、生まれながらのコンパライストたちだった。

アメリカは人種の国である。わたしはそれまでの研究において人種やジェンダーといった問題にまったく関心をもっていなかった——こう書くと、当時の自分を過大評価することになるだろう。わたしは、社会問題に接続して人文学にコミットするという行為を心から軽蔑していたのだ。人文学は社会から独立し、それ特有の価値観で自律し自立している、だからそれを人種やジェンダーなどといった社会問題の解決に奉仕させることは人文知の道具化であり矮小化であり……とまあ、そんなことをナイーヴにも考えていた。当時はまだ、学問について真剣に考えたことがなかったのだ。

が、そんな迂闊なわたしでも、自分はアメリカではアジア人という人種的マイノリティであり、それはつまり有色人種という被差別アイデンティティの持ち主であることを意味する、このことは理解していた。そのようなことを強烈に意識せざるをえなかったのは、そう、トランプ就任の年に留学したからである。

ニューヨーク州はブルー・ステイト、つまり民主党を支持するリベラルな州として知られているが、留学してすぐに、わたしはビンガムトンが位置するブルーム郡はトランプ支持だと知った——というか、二〇一六年の大統領選の結果を検索してみてもほしい。ニューヨーク「州」内は、ほとんど真っ赤なのだ。わたしにとってアメリカ留学は、人種問題の部外者から、その当事者になることを意味していた——それも、有色人種という被害者と

して。

このニューヨーク州というリベラルな州のなかにあるブルーム郡という保守的な郡のなかにあるビンガムトン大学というリベラルな大学において、わたしは比較文学科という学科の性質上、英文科、美術史、映画学など、さまざまな分野の授業を履修・聴講することになった。そのなかで一年目にとったアジア科の“Unresolved Issues”¹すなわち「未解決問題」というタイトルの授業が、上述したわたしの想定を、根本から覆すことになる。

ここでいう「未解決問題」が指すものは、アジア太平洋戦争における従軍慰安婦問題、南京虐殺問題、そして原爆問題の三つだった。その授業の担当教員は日本文学の研究者で、所属はアジア科である。アメリカの大学のアジア科で、題材が文学となると、その履修者の大部分は女子学生となる。じっさい、この授業の約二〇人の履修者のうち、男性はわたしと、もうひとりの白人だけで、あとはすべてが女性だった。

それだけではない。彼女たちの出身は、中国、台湾、韓国、ベトナム、フィリピン、シンガポールなど、ほぼ全員が日本に侵略された歴史のある国をルーツにもつ女性たちだったのだ。そうした女性たちに囲まれながら、わたしは唯一の日本人男性として、従軍慰安婦問題という自国の軍事性加害の歴史について学ぶことになった。被害者になることを覚悟して訪れたはずのアメリカで、わたしはいきなり加害者の立場に置かれることになったのである。

むろん、人文系の学部ですでに十年以上学んでいた者として、わたしはみずからの加害性に向きあうだけの心構えはもっていた。日本はかつてアジア太平洋の各地で残虐の限りを尽くした。むろんわたしはアジア太平洋戦争を生きていないわけだが、その責任の一端を、わたしも担っていることになるだろう。ここで「いや自分には関係ない」などと考えるような人文系の院生は、まずいない。アジア太平洋戦争を直接経験した生き残りはいずれ死に絶えるのであり、そのことによって「未解決問題」が解決するわけではないのだから、いずれ問題はわれわれへと継承されざるをえないのであり、わたしはそれと無関係ではありえない。

だがそこにはもうひとつの問題があった。自分も加害国の一員として責任を引き受けよう——そのようなリベラルな宣言は簡単だが、しかし、終戦から七〇年も経ってから後世の人間が引き受けられる「責任」とは、具体的にどういうものなのか？「自分にも責任があります」と宣言することでわたしが達成していることは、「自分には関係ない」と宣言する者たちと自分は違う人間でありたいと言っている程度のことにすぎない。いやじっさい、いまさら自分ごときになにができるというのだろうか？わたしは結局のところ部外者にすぎず、むしろ当事者ぶるほうが不誠実なのではなからうか？わたしのような部外者に、はたして意味ある応答は可能なのか？かりに可能なのだとしても、それは当事者の応答の劣化版にすぎないのではないか？あるいは、ひよっとすると、部外者だからこ

その可能な応答というものがあろうのだろうか……

二〇二五年一月、第二次ドナルド・トランプ政権が発足する。四年の遅れを取り戻すかのように初速からフルスロットルで反動保守主義を全面展開しているトランプ政権の標的——いくつもある標的のひとつ——は「リベラル」な価値観そのもので、これはアメリカで「文化戦争 culture wars」と呼ばれてきた「戦争」のリバイバルである。

この文化戦争とは、たとえば銃の規制やセクシュアル・マイノリティの権利といった諸論点について、保守とリベラルで価値観がまっぴらに分断されており、いっこうに仲裁の見込みがないので、それを戦争に喩えた表現である。このメタファーがどれほど適切なのかはわからないが、「政治」とは「友」と殲滅すべき「敵」とを分かつことであり、また「戦争」とは暴力的な様態における政治の延長であるというふたつの古典的な定義にしたがえば、それはまさに戦争状態と呼ぶにふさわしい事態であると言えるのかもしれない。これと似た分断の状況は、日本でもはつきりと可視化されている。その「戦争」において、おそらく、本書の読者の大部分はリベラルの側に与することだろう。だが、それはどちらでもよい。いま問いたいのは、まさしくこの「どちらの陣営に与するか」という選択肢そのものののだ。

われわれは本来、「この特定の問題について、いまこの場でこう聞かれたら、どう答え

ますか」という問いかけにそのつど答えることができるにすぎず、本質的にリベラルや保守といった陣営に「所属」できるわけではない。それはなにがリベラルでなにが保守なのかの基準がつねに揺れ動いているからでもあり、個人が抱く各トピックについての考えもまた、つねに揺れ動いているからである。

にもかかわらず、「リベラル」や「保守」が固定的な、帰属可能なアイデンティティとみなされるとき、われわれは全個人を陣営Aと陣営Bに分類できると錯覚する。だがじつさいは人間も世界も、そんなに単純ではない。すべてのイシューについて完全にリベラルまたは保守的な意見を持ちつづけることは不可能なのであり、われわれは刻々と変化するモザイク状の思想のパレットをそれぞれ持つにすぎないのだ。だがどちらにつく人間なのかという陣営選択の二元論に囚われるとき、われわれはこの複雑な世界について思考することをやめている。そこに戦争状態が出来る——すなわち、分断という偽の問題が。

陣営に所属しているという感覚は、ひとに安心感を与える。味方ができたと感じるからなのだろう。それはよい。だが同時に、陣営に属しているという安心感は、とたんにひとを暴力的にする。それは、仲間ができたことで気が大きくなるためばかりでなく、陣営に所属するという「政治」的な手続きが構造上、殲滅すべき敵の仮構を必要とする行為だからなのだ。炎上という名のネットリンチがしばしば行き過ぎてしまうのも、自分は悪しき炎上者の断罪を目指す正義の陣営に立っているのだと攻撃者たちが信じるからにほかなら

ない。

だが、「みんなで殴っている」と信じて殴っているひとのなかに、ふと振り返るとじつは自分ひとりでその「敵」を殴り殺していたことを知っても、いや自分は自分の信念にもとづいてこいつを殺したのだと宣言して責任を負う準備のあるひとが、いったいどれほどいるだろう。陣営のうしろだてを失ってもなお単独でその暴力を眼の前の個人にたいして行使しつづけるつもりでそうしているひとが、いったいどれほどいるだろう。

生身の人間の思想を検分すれば、「敵」陣営の「あいつ」はもちろん、あなたと同じ陣営に属する「友」とさえ、意見がシンクロすることなどありえない。あなたが保守であってもリベラルであってもだ。じつさい、右の炎上と暴力についての記述は、もはやリベラルの話をしているのか保守の話をしているのか判断できまい。右だろうと左だろうと、陣営に所属したいという欲望は似たような結果をもたらす。現実を分断としてとらえ、そのどちらかの陣営に帰属したいと欲望することそのものが、分断への加勢だからだ。真の問題は陣営選択よりも手前にあり、そこに立ち戻れば、ほんらい、どこにも殲滅すべき敵などいないのである。

これはリベラル／保守という政治的な左右の選択にかぎった問題ではない。「おまえはどっち側なのか」という分断的な思考回路に構造的につきまとう問題である。どちらの側にもつかずに生きること、陣営に帰属したいという欲望にあらがって生きること——ここ

に、わたしが留学時代に出会った部外者という存在が、当事者性からの疎外の問題が、そして部外者だからこそ可能な応答はありうるかという問いが、再浮上してくる。

部外者は、分断状況の攪乱者となる。もちろん、「当事者」の対立陣営として「部外者」なる人間や集団が存在しているわけではない。ここで考えたいのは、ふるまいや思考様式としての、部外者性のようなものである。部外者の部外者性は、「自分には関係ない」と応答を拒否するための口実でもなく、善意の中立性を詐称するための仮面でもない。それは、「陣営」に帰属することの拒否である。部外者は「戦場」において、あたかも「戦争」が起こっていることに気がついていないかのように、その戦線をずかずかと横切る存在だ。その行為は、いずれの陣営から「友」認定されることを妨げるだろう。だがそれは同時に、現在そこで起こっているようにみえる不可避の「戦争」に参戦せずに生きる可能性を体現する存在でもある。

これはたんなる考えかたの問題ではない。あなたもわたしも、あるいは دونالد・トランプのごとき存在でさえ、じつさいに両陣営を行ったり来たりしているのだ。部外者は軽やかなのではない。不安定なのである。そしてそれはわれわれの思考が不安定であるいじょう不可避なのであり、その不安定なわれわれにできることは、それぞれにモザイク状の思想のパレットをもちよって、ある特定の問題についてしばし対話することしかない。そのときあなたは、どちらの陣営を訪れようと、あるイシューについては話が合い、ベ

つのイシューについては合わない、そのような人間がひとりひとり存在しているだけであるという、ごくあたりまえの複雑な現実に出会うことになるだろう。

わたしは「未解決問題」の授業の期末レポートで、まさしく『慰安婦』というタイトルの小説を論じた。その当時から現在にいたるまでわたしが試みつづけていることは、当事者性を引き受けようとすることをゴールにせず（それは大前提である）、部外者にすぎないかもしれない存在として、しかしほかならぬわたしという個人として、その問題に应答すること、その意味をあきらかにしながら应答することである。

たとえばわたしと慰安婦問題の関係を例にとっても、日本人男性というわたしのアイデンティティひとつがそれを確定させるのではない。わたしは、自国の歴史的暴力について真剣に考えたことのない迂闊な留学生として、被害者になるつもりでアメリカに渡ったとたん自国の加害性を突きつけられて慌てるような日本人男性として、戦争を経験していない一九八七年うまれでありながら一九二五年うまれで従軍経験のある父をもつ奇特な戦争第二世代として、この問題に対峙するのだ。

わたしの応答は、どの陣営をも代表していない。それはわたしという個人による、あまりにも非力な応答である。だが、それでいいのだ。ほかならぬわたしという非力な部外者があえて応答することの意味、すなわちわたしの応答の代替不可能性は、この個別性にしか宿りえないのである——だって、それがなんらかの立場を代表する意見なら、ほかなら

ぬわたしがそれを発する意味などないではないか。そんなもの、AIにでも書かせておけばいい。

ところで、それはつまり、自分にとって意味のある人生を生きることの条件にほかならないのではなからうか。陣営のサポートを振り切って、部外者として生きることの覚悟した者にのみ、ちっぴけな自分の人生を生きることの意味は立ち現れる。そのような生きかたを取り戻すために、あなたのうちに眠る部外者との対話をはじめよう。